

「音楽」から考える子どもの自発的身体表現活動*

— 保育者の視点を踏まえて —

井 中 あけみ
高 橋 うらら**

I. はじめに

平成29年3月31日の3法令改訂・告示（幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領）は、乳幼児期（幼稚園・保育所・認定こども園）・小学校・中学校・高校教育まで、大きな流れを含めた上での改訂とされている。そのなかでも、幼稚園教育要領に「幼児期に育てたい力」が明記されたことは、今回の改訂のポイントの一つといえよう。

無藤は、「幼児期にふさわしい教育」として行うべき活動について、「さまざまな発達の子どもたちが、主体的に周りの物や人（環境）と関わりながら、心動かされる体験・遊びをすること—後略」¹⁾と述べている。さらに、これらは小学校教育を先取りすることではなく、「子どもが身の回りの物や人に関わりさまざまな意味や規則性を見つける過程で生まれる、気づき・発見・考え方や態度の変化などを指す。」としている。これらの視点から考えるに、5領域の中にある「表現」は、自発的に又は他者と協働することから「表現する」ことの喜び又そのプロセスで起こる様々な出来事を体得できる活動に注目すべきであろう。特に身体表現や音楽表現は技術的な修得に偏り、またそこに依存している保育活動方法が多くあることは否定できない。今回の改訂に基づいて、子どもの表現教育は科目的な要素に捕らわれることなく、子どもたちの「生きる力」に繋がっていく表現教育を探求する必要があると考える。

本論は、領域「表現」を根底として、主体的という活動の部分に重きを置き、音（音楽）をきっかけとする子どもの自発的身体表現活動の実践と調査、また保育者への表現に対する認識調査を行った。今後さらに幼児期の表現教育を充実させていくため、幼児のための音楽教育の新たな方向性や視点を探ると共に、これまでの問題点及び改善について考察していくものである。

語義規定

本論における「身体表現活動」は、「感じたことや考えたことを自由に身体で表現すること」を示す。「即興的身体表現活動」については、その場にて聴いた音楽を考えたまま感じ

* 本論は、2017年5月12日（土）・13日（日）の第71回「日本保育学会」にて、ポスター発表を行った『子どもの自発的身体表現を引き出す音楽素材に関する調査』データを基に加筆したものである。

** 東京都市大学 人間科学部 児童教育科 高橋うらら

1) 無藤 隆著『3法令改訂（定）の要点とこれからの保育』チャイルド本社 2017年 p.27-28

たままに身体で表現することを示す。また「動く」という表記は「身体で表現する」と一致するものである。

I-1. 問題提起

5領域でいわれている「生きる基礎となる心情・意欲・態度」は、小学校、中学校教育要領にある「学びに向かう力、人間性等」に当たるところのものである。その音楽科の涵養に関する目標では、全学年において、「音楽に関わり」「協働して音楽活動する楽しさ」「様々な音楽に親しむ」としており、自ら音楽に関わっていくことが重要であることを示している²⁾。主体的、創造的に音楽活動に取り組んでいくということは、その楽しさを知っていることが前提であり、それこそが幼児教育の時期に体験すべきことであろう。その意味から考えていくと、これまでの幼児の音楽に関する活動の大半は、歌唱・合奏・鼓笛隊など、主体的・自発的活動とは方向性が違うものが多くあるように見受けられる。またリトミックなどの音楽教育が実践されている現場も多くあるが、目的が明確でない点も含め、主体的・自発的活動との関係性には、少しズレがあるようにも思われる。このことは、音楽による表現教育の実践方法が、各々の幼児教育機関の教育方針に任されているところに、要因があると考えられる。

そこで本論は、今回の改定に基づき、改めて幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域「表現」にある「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」に注目し、音（音楽）をきっかけとした子どもの表現についての調査を実施し、それを分析していくこととした。そしてその中から子どもの自発的表現の方向性、発展性、可能性について考察していくことは、保育者たちの「表現」に対する関心を高め、より具体的な保育内容を確立していくことに繋がると考える。

さらに「豊かな感性」という語彙については、5領域の中では、「表現」のみに提示されており、その重大さや使命は計り知れない。峯岸は、「感性は、よいものや美しいもの、価値あるものへの「一瞬のひらめき」や「気づき」である。」³⁾としているが、子どもたちが現代の人間関係について対応していくことや、感性を育てていくための表現教育とは、自然を通じた環境の中から、自らの諸感覚で感じ表現できるような経験を持つことであろう。このことについて、峯岸は、「音楽教育が目指している、感性の育成とは、人間と音楽、人間と人間とのかかわりなど、人間周辺にかかわるすべての環境教育の分野に通ずるものである。」と述べており、環境教育が感性教育に必要不可欠であることを語っている。この意味からも、子どもたちへの音楽教育が、単に技術的向上を目的とした活動でなく、「生きる力」に結びついていくための表現の活動として行われるべきであること、そしてその実現に向けての課題は、量・質共に多大なものといえるであろう。

ここで、音に関する環境という言葉から連想されるものの一つに、「サウンドスケープ」

2) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』東洋館出版社 p.18

3) 峯岸 創著『音楽教育が変わる』音楽之友社 2002年 p.149

が挙げられる。これを提唱したマリー・シェーファーは、「現代の『文明化された』社会では、音は科学の一領域に組み込まれてしまった。そのために音は、様々な感情や記憶をかきたてる力の多くを失ってしまった。たとえば、こだまを専門的に説明することはできる。けれども、自分の声がかまた戻ってくるのを聴いたときに覚えるあの喜びは、いつもむしろ魔法に近いように思われる。」⁴⁾ といっている。急速に変化していく現代社会に対し、シェーファーは、「聴く」ということに焦点を当て、あらゆる意味での「聴く」ことへの再構築を促したといえよう。また、シェーファー⁵⁾ は、「紙に書き出す」「音のお絵かき」「音聴き歩き」など、「聴き方」の体験的実践的な100の課題を用意している。これらについて、鳥越は、「耳の教育といってもその内容は、「正しい手本を指し示して教える」といった従来の「教育」のイメージとはかなり異なるものである。「異なる聴き方への気づき」「多様な聴き方の発見」といった「他者の理解」を大切にすることである。」⁶⁾ と述べている。ここでいう、「他者の理解」は、今回の3法令改訂においても重要視する部分であり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の中にある「協同性」や「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」などの項目にも値するものといえる。音（音楽）を聴くという行為を通して、子どもが環境の中にある様々な表現に気づき理解することとは、保育環境の中でこそ自然に受け入れられる取り組みであるとも考える。

I-2. 研究目的

筆者は、これまでも「音」を素材とする「即興的身体表現」について実践調査を行ってきた。乳幼児期の表現については、音楽と身体が同時に表現されることが多くあり、これはこの時期の未分化な子どもの表現の特長と考えることができる。このことを活用し、筆者はこれらの活動が、自由で発展的に行えるような、音（音楽）をきっかけとした即興的身体表現活動調査を実施してきた。また、そこから身体を活用した子どもの自発的表現に結びつけることができる音楽教育の考察を試みてきた。

一般的に音楽表現活動とは、技術面に重きを置いた演奏活動や歌唱活動、合奏活動を指すことが多く、見た目の楽しさや「出来栄え」を意識し完成させるというものが一般的であるといえよう。また時にそれは、その場で与えられた、規制的断片的な表現の活動であることが多い。一方自らが主体的に関わり、心情的にまた環境（音や人など）との関りから、諸感覚を機能させ考え行動を起こすという表現、「自発的表現活動」がある。筆者は、今回の調査についても、後者の幼児の表現活動を土台として、実験・調査・分析を試みた。さらにこの音（音楽）を介すことから引き起こされる様々な表現行動の調査、発見から、今回の3法令改訂に伴った子どもの音楽表現教育の内容の具現化を目指し、またそれが、今後子どもの主体的な学びの一つとなれる表現活動内容にしていきたいと考える。

吉永は、「『聴くこと』によって子どもが感じ受けたもの」を大切にしたいと思う。表現

4) R. Murray Schafer マリー・シェーファー著『サウンド・エデュケーション』（鳥越けい子／若尾 裕／今田匡彦 訳）春秋社 1992年 p.94

5) R. Murray Schafer マリー・シェーファー著『サウンド・エデュケーション』（鳥越けい子／若尾 裕／今田匡彦 訳）春秋社 1992年 p.11, p.29, p.30, p.65

6) 鳥越けい子著『サウンドスケープ【その思想と実践】』鹿島出版会 1997年 p.94

活動のなかで子どもは、彼らの内面に記憶されたさまざまな事象や情景を思い浮かべ、それらを新しく組み合わせながら、想像の世界を構築するプロセスに「音」の感受が介在している。」⁷⁾と述べている。このように、聴くこととその他の感覚の融合又は相互的に作用しながら表出へと導いていく様々な過程は、幼少期にこそ経験させたいものであり、また後の表現力の土台となるものと考えられる。

このような観点から、本論では子どもたちに音（音楽）を聴かせ、それを如何に感じて自発的表現活動を行うのかを調査した。さらに、子どもと保育者による「自発的な即興的身体表現活動についての振り返り」を記録し、調査人***と保育者によりそれらの分析を行っていく。聴くことを通して表れる子どもの動き全体を「表現」として捉え、そこから検出される子どもの動向から、保育者自身の表現に対する考え方や問題点、日頃の保育環境などへの気付きについても調査することとした。

II. 研究方法

即興身体表現や創作身体表現などについては未経験の子どもたち4、5歳児が、聴き馴染みのない音楽を聴き、それぞれが自由な動きで即興的身体表現活動を行う。さらに、活動後、保育室にて保育者と子どもたちが活動の振り返りを行い、それらを保育者が記録し調査人（井中、高橋）に報告する。子どもたちの活動の様子はビデオで撮影し、それを視聴しながら担任保育者と調査人で分析を行う。同時に担任保育者自身の感じ方についても調査人からインタビューを行う。また子どもたちが「自由に自発的に動く」ということについては、細かな動きや体の使い方だけに注目するのではなく、5曲全体に馴染んでいるかどうかを重視し分析を行うこととした。

II-1. 対象

対象：静岡県A幼稚園

年長3（A.B.C）クラス（90名） 保育者3名と補助保育者3名

：第1回目 平成29年12月18日（月）午前10時～

年中3（D.E.F）クラス（88名） 担任保育者3名と補助保育者3名

：第2回目 平成30年1月15日（月）午前10時～

調査には、保育者も子どもと同様に参加する。調査は一クラスずつ実施し、6クラスとも同様の方法で調査し、場所はA幼稚園遊戯室で行う。記録はビデオ撮影で行い、園児への撮影許可は事前に保護者より得ている。但し公開はしないことを約束している。

II-2. 調査の使用曲について

使用曲は、ウィリアムL.ギロックのピアノ曲より、題名のあるピアノ曲5曲を選曲した。

①「十月の朝」（+トライアングル） [演奏時間0：50]

7) 吉永早苗著 無藤隆監修『子どもの音感受の世界』p.19 萌文書林 2016年

*** 調査人と筆者（井中・高橋）は同じである。

- ②「すてきなスキーヤーたち」（+ウインドバーチャイム）[演奏時間 0：58]
- ③「ダイアナの泉」（+鈴）[演奏時間 1：05]
- ④「夏のあらし」（+太鼓）[演奏時間 0：45]
- ⑤「飛翔」（+シンバル）[演奏時間 1：10]

楽譜：A. ギロック作曲『叙情小曲集』⁸⁾ より

- ①「十月の朝」③「ダイアナの泉」④「夏のあらし」⑤「飛翔」

B. ギロックとグレンダの『魔法のピアノ～七つの白い鍵盤から～』⁹⁾ より

- ②「すてきなスキーヤーたち」

選曲理由：①ギロックのピアノ曲は、幼児の鑑賞時間に対して、適切な演奏時間範囲と判断できるため。

②ギロックは、この作品の中の一曲を甥（おそらく幼児）のために書いていると言われており¹⁰⁾、これらの曲は子どもを対象とした作品として作曲されたと考えられるため。

③それぞれの子どもの動きに対し、調査人それぞれの分析に主観的で極端な違いが生じることを回避するため、楽曲の題名を判断基準とする。

④歌詞のないピアノ楽曲を選択することにより、子どもが言葉から受ける先入観を回避でき、より自由な発想を期待できると考えるため。

⑤同じリズムを繰り返したり、拍を刻むような身体の動きをしたりしないよう、メロディーが特徴的なものが調査としてわかりやすいと判断するため。

II-3. 演奏方法

調査曲 5 曲はピアノ独奏曲であるが、その演奏に加え子どもたちが馴染みのある「打楽器」を使用し、調査人（井中）のピアノ演奏と打楽器演奏熟練者が演奏を行った。打楽器を用いることについては、子どもたちが即興的身体表現活動を展開していく過程にて、曲目を区別できるきっかけが必要と考えたため、調査人（井中、高橋）と打楽器演奏熟練者の曲へのイメージを集約し、各楽曲にそれぞれ打楽器を加えて演奏することとした。しかし、子どもには、音を聴くということに集中させるため、演奏時に楽器の説明はしていない。また演奏は調査会場にて行ったため、子どもの集中力を妨げないよう、子どもたちの活動場所からは距離を取って演奏し、演奏エリアに侵入できないようなパネル（演奏している姿は見えている）を用意した。

さらに子どもたちには題名は告げず、使用楽器についても説明はしていない。これは、できる限り子どもの自発的活動が音以外の先入観を持たず、聴くことへの意識を集中させた活動とできるよう配慮を試みたものである。

尚、本調査では 5 曲を続けて演奏し、5 曲を通した観察を行った。

8) ウィリアム L. ギロック著『ギロック叙情小曲集』全音楽譜出版社 1998年 p.13, p.30, p.16, p.33

9) ウィリアム・ギロック/グレンダ・オースティン著『魔法のピアノ』全音楽譜出版社 2011年 p.10-11

10) グレンダ・オースティン（ピアノ演奏）『ギロック/叙情小曲集』ビクターエンタテインメント 録音1998年
曲目解説 安田裕子 p.3

Ⅲ. 調査内容

子どもたちは遊戯室にて、保育者と調査人から自分たちの行う活動について説明を聞く。その後子どもたちが調査人と初対面であることや身体表現活動に対する違和感を軽減するため、身体表現熟練者（高橋）が、即興的身体表現の調査前に、身体活動のウォーミングアップを行う。これらの活動への取り組み方については事前にも保育室にて、各クラスの担任保育者より各々の言葉で説明がされている。尚調査は第1回目も第2回目も同様の方法で実施する。

〈時系列による調査内容順〉

- ①ウォーミングアップ（身体表現熟練者による）
→伸びる、跳ぶ、緊張・弛緩等をオノマトベによって行う。
- ②調査の説明（保育者と身体表現熟練者による）
- ③楽曲の鑑賞（調査人による生演奏）
- ④即興的身体表現活動（身体表現熟練者がファシリテートし、担任保育者も参加して行う）
- ⑤調査後、子どもたちは各クラスに入り、担任からインタビュー調査を行う。インタビューの仕方は子どもたちと保育者に任せる。インタビューの内容は、「活動について感じたこと、思ったこと」とし、子どもたちが感じたことを担任保育者が聞き、拾い上げて記録する。
- ⑥保育時間終了後、担任保育者と調査人でビデオの記録を視聴しながら再度観察を行い、さらにその観察に対して担任保育者からの感想を記録する。補助保育者は観察には参加しないが、本人からの感想があればそれを記録こととする。

Ⅲ-1. 調査記録 一年長児一

[表1]

①第1回目 年長児3クラス（90名）、担任保育者3名と補助保育者3名
<p>Aクラス</p> <p>〈子どもたちの動きについて〉－担任保育者と調査人の観察結果－</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どう動いてよいのか周りの様子をうかがっている子どもが多くいるが、ファシリテートする調査人の動きを真似るのではなく、担任が動きを始めると子どもも動き始めた。それに慣れてくると担任保育者の周りから離れ、様々な場所で動きを始めた。 ・大まかには、音を求めて自分の感じたことを探りながら動いている子ども、自らの動きになりきって表現している子ども、周りの様子から自分の動きを探そうとする子どもの三つに分類された。 ・ファシリテーター（身体表現熟練者）には、殆ど興味を示さないが、時々ヒントを得ようと近づくものの、すぐに周りの友達などを意識し、そこから寝転んで手を伸ばさず、手を繋いで回る、かえるのように跳ぶ、身体を上になく細く伸びる動作をするなどが見られた。 ・担任の保育者としか一緒に行動することができないI君が、担任に一度も近づくこと

なく、友達と手を繋いで、表現を行っていた（楽しんでいる）。また、一人での表現と友達の手を繋いでの表現を混ぜながら、曲に対しての集中を欠かさない自発的な表現を行っていた。

〈子どもたちの事後の感想〉—調査の言葉通りの記載—

- ・音が大きいところが怖かった。
- ・緊張していた。
- ・いろんな音がして、いろんな気持ちがして難しかった。
- ・ドキドキした。

〈担任の感想〉

- ・自分自身がこのような表現はとても苦手だと思っている。思うように動けない子どもの気持ちがわかると感じた。
- ・子どもたちには、卒園前、小学校への準備として、「お話をしっかりと聞きましょう」と指導しているのに、このような自由な活動は、答えがないため不安になった。しかもガチャガチャしているように感じたため、「これでいいの?」と感じていた。
- ・ビデオで子どもたちの動きを見てみると、「こんな表現ってあるのだ」と思った。
- ・表現の活動中には見逃している子どもたちの動きが多々あり、画面を改めて観てみると子どもたちがそれぞれに何かをしようとしていることが見て取れる。鑑賞してよかった。

Bクラス（Aクラス同様の動向や文言については、以下表記を省略）

〈子どもたちの動きについて〉—担任保育者と調査人の観察結果—

- ・普段はほとんど話せない子が、音楽の部分的な特徴毎に、自分が真似したい人を探しているように感じられた。
- ・日頃からダンスの好きな子が、豊かな表現力（足と手の伸縮、回転、揺れるなど）で動いていた。
- ・自分の身体をくねらせ、友達の合間を通り抜けながら人のいないところを探して表現しようとする子がいた。
- ・動きが止められない、始終動いている子がいた。徐々に慣れてくると、音が止まると表現も止まり、その止まった時のポーズを表現しようという行為がみられ、そこに意識が集中し、調査側が本来の意図する内容から、次第にズレてしまった。
- ・誰かの動きを真似ようとする動作が多くの子どもに見られた。
- ・途中から周りの動きに嫌気がさしたような表情をする子どもがいた。それを真似した友達が同じ行動をみせ始めた。そして座り込み反抗的な態度とみられる行動が表れた。
⇒後の本人へのインタビューでは、みんなが統一の動きをしないことが不安になり、動くことが嫌になったと回答している。

〈子どもたちの事後の感想〉—調査の言葉通りの記載—

- ・光（音から）を感じた。・きれいな音がした。・風を感じた。・かっこよかった。
- ・こわかった。・ビューン・ザーザー・ポツンポツン・かみなり恐かった。
- ・最後の曲は優しい、かわいい。

〈担任の感想〉

- ・※リトミックの活動を1年前から経験しているため、動くことには慣れていると思うが、この活動は見本がないので、子どもにも、保育者にも動きにくいと感じた。
- ・日頃から個性が強いクラスと思っているが、この活動に対しては、動きを気にして周りの目を気にしているという特徴がよく表れていたと感じる。
- ・なかなか友達と関われないコミュニケーションが不安定な子どもが、自らの腕をいっぱいに広げ、身体を精一杯使って表現していた。
- ・他のクラスの様子はどうなのか、見てみたい。

Cクラス

〈子どもたちの動きについて〉－担任保育者と調査人の観察結果－

- ・何もせずじっとしている子どもがいた。→担任が大丈夫かと尋ねると、「風を感じている」と答えた。
- ・自分の表現に没頭している子どもが、柔らかく身体を使い縦横や上下に手足を使い表現していた。音楽に集中している様子を見て取ることができ、感じたままの表現が自然にされていたように見え、感動した。

〈子どもたちの事後の感想〉－調査の言葉通りの記載－

- ・かみなり ・びっくり ・明るい音 ・踊りやすかった ・暗い音がした
- ・怖い ・嫌だった ・ピアノが静かな音がした ・大きい音は踊りやすい
- ・難しかった ・音がきれいだった ・音がキラキラとした

〈担任の感想〉

- ・撮影記録を見て、友達同士で楽しんでいる様子が確認できた。
- ・解放感を感じているのか、活動時には「理解して動いていない」と見受けられた子どもたちは、周りから刺激されて動いていたり、時には刺激を与えながら動いていたり、動きのパターンを変化させ、動きを模索しようとする態度が画面からは見て取れた。
- ・活動中は、子どもたちが何に反応して動いているのか、また分かって動いているのか不安に感じていた。
- ・活動中子どもたちは、自分（保育者）が予想する動き方として表れてこないため、自由ということが良いことなのか疑問に感じた。（保育者自身が動きのイメージが浮かばない、やり辛い。）
- ・日頃の活動時は、あまり集中できないクラスであるが、今日は集中していたように感じた。
- ・※リトミックの時はもっと動けており、生き生きとしている。みんなの動きがはっきりとわかっているれば、もっとまとまって形になるはず。
- ・「こんな活動で大丈夫なのか」と、不安になった。
- ・他のクラスはどんな様子なのか、子どもたちの動きはこれでいいのか。
- ・日頃は、大人としか関わらず、大変おとなしい子どもが、友達の中に混じり積極的に動いていた。

〈年長児の分析・考察〉

全体的にA.B.Cのクラスの子どもたちの動きについては、周りの友達の様子を気にするという動作が、頻繁にみられたことが特徴として挙げられる。

〔表2〕はⅢ-1の調査記録を基に、年長児の動き方の特徴を分類し集計したものである。a～eの項目についての分類は、調査人と打楽器演奏熟練者の協議によって行い、それぞれの項目に該当する子どもの分類については、担任保育者、調査人、打楽器演奏熟練者の協議によって決定した。

〔表2〕

動き方の特徴	90人中（3クラス）	
a. 個々で音楽を聴き入り、動きに集中している	7人	8%
b. 自分で動きながらも、担任（又はファシリテーター）の動きを取り入れようとしている。	10人	11%
c. 友達同士で関わって動いている（個々のグループ） 友達の動きから自分の動きを考えようとしている	48人	53%
d. 不明（予想できない）な動きをしている	17人	19%
e. 無関心のように見える （事後の感想などからは無関心とは判断できなかった）	8人	9%

この表1の結果からは、友達の動きに関心を示している子どもの割合が多いと読み取ることができる。またこの動きの中には、集団での周りの様子から、自分なりの動きを考えようとヒントを求める動向も含まれている。これらは、3法令改訂の中にある、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「豊かな感性と表現」について関連するものであり、「友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わい、意欲が高まるようになる」¹¹⁾ についての活動に匹敵するものと考えられる。無藤はそれについて、「自分が感じたことを表すのが表現ですが、もう一つ大事なのは、表現するプロセスの中で見えてくる、聞こえてくるものを受け止め、楽しむこと。それが「友達同士で表現する過程を楽しんだり」ということです。（原文のまま）」¹²⁾ といっている。

さらに、子どもたちの感想からは、即興的に身体を動かしている、又は動かそう、という活動の中で、音を対象として様々なイメージを持ったことが推察される。ビデオ記録からも、彼らが身体を動かすことに戸惑いや困難さを感じるというよりは、音楽が流れてくる都度、音楽から感じる躍動感、明暗、美しさ、優しさなどへの感受をいかに表現したらよいか、何か理解できる動きはないか、といった「動き」を表現する目的のために、周りの友達を観察したりきっかけを探したりという姿を捉えることができる。事実、曲が変わる度に身

11) 文部科学省 「幼稚園教育要領解説」 p.67-68

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/04/25/1384661_3_3.pdf

12) 無藤 隆著『3法令改訂（定）の要点とこれからの保育』チャイルド本社 2017年 p.37

体を動かす方向が変化したり、身体の一部を静止させたり動かたりしながら、目では周りの動きを観察し、納得のいく動きのヒントを探そうという光景がいくつもみられた。また、動きの速度や緩急についても「聴く」ことからその音の変化に対応しようとしていることが見て取れた。小島はこのことを「同化」としており、「対象に自分を合わせて関りをもつということ、すなわちなじむといういみをもつ。—中略—そして対象になじむということの背後には、対象の全体的な印象、あらまし、あるいは、対象の根底に流れている動きをとらえることが期待されている」¹³⁾と述べている。この調査においては、小島のいう「対象になじむ」ということについての動作の過程が、十分とは言えないが、子どもたちの活動から見る事ができたと考える。曲全体から受ける印象やピアノの音色、打楽器から受けるイメージを自分なりに感じ、動きとして表現することができている子どもが（〔表1〕 a. b. c. の合計）70%以上存在していた。また、保育者から子どもたちへのインタビュー調査時の「自分なりに動くことができましたと思いますか」という質問には、全体で71名（約79%）が「できたと思う」と回答している。

子どもたちは、「作られた形を正確に繰り返すことが身体活動」と固定観念を持っているわけではなく、音を聴いて感じそれを自分なりに表現したり、またそれを模索するような活動をしたりしながら、その場に徐々に馴染んでいっているのである。このことは、領域「表現」の「豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」その過程での「自分なりに表現する」という行為そのものが、ここで実践できていると考える。

しかしながら、年長の担任の事後感想からは、今回の即興的身体表現活動に対しての不安（下線部分）や、見本のない動きに対する恐れが訴えられており、活動の最中においても担任自身が不安定な状態であったことが読み取れる（それぞれ担任の感想の下線部から）。また、他の時間でのリトミック活動（リトミック教育であるかは定かではない）についての子どもの動きと、全く異なる子どもたちの今回の様子に不満を訴えてきた保育者もいた（補助保育者からの自主的な感想）。つまりこの補助保育者は、活動についての動き方の解答がないため、子どもたちは困惑して動けていない、「日頃はもっとはっきりと動きを表現している、動きのパターンを明確にし、活動内容ははっきりと決めて行えば、子どもたちはしっかりと動けたはず。」と感想を述べている（〔表1〕の※の担任の感想から）。

これについて補助保育者は、明らかに「出来栄え」の評価を意識していたと考えられよう。この保育者自身が子どもたちの日頃の力量が証明できていない苛立ちのようなものを感じていることも推測される。さらに、Aクラスの担任については、就学前の子どもたちへの指導（静かに先生の話の聞く、着座するなど）について自分たちで取り組んでいる内容と、今回の活動が対照的なものではないかと感じており、この活動は負の要素ではないかという不信感まで述べている。そしてこの保育者の不信感は、子どもたちの自由で自発的な活動に何らかの心理的影響を与えている可能性も考えられ、保育者と子どもたちとの活動の振り返り時の言葉が、短い単語で記録・報告されていることや、子どもたちへのインタビューの仕方が端的なことなどからも、保育者の気持ちが前向きではなかったことが窺える。このように子

13) 小島律子著「音楽学習における身体活動の展開」『大阪教育大学紀要 第32巻 第一号』1983年 p.92

どもたちの気持ちをインタビューから引き出そうとする傾向がみられなかったところからも、この保育者からは活動の内容や目的に対する理解を得られず、結果調査への不信感が明確であったといえよう。

これらの観点から考えると、第1回目の調査は、調査側から保育者側への自発的表現活動への十分な説明、即興的身体表現活動についての保育者への資料提供、試験的実践などの準備が足りていなかったことが、調査への欠陥となっていることが浮き彫りとなった。子どもたちに、自由な自発的活動を実践するためには、調査前の段階で、保育者に対しさらに十分に時間をかけて内容説明を行うことが必要であったのである。これが第1回目の最大の問題点として挙げられた。

小島は、「幼い子供が音楽を聞きながら一中略一子どもは音楽の中にはいりこみ、その音楽をつかんでいるのである」¹⁴⁾ といっている。子どもが何かを感じ取り、その表現を模索したり、自分の表現のためのヒントを自ら得ようとしたりする姿が、幼少期にこそ必要であると考えれば、保育者自身がこれら自発的表現活動についての経験、理解、実践法を心得ることは必要不可欠である。そのため子どもたちの表現活動についての具体的実践例、その効果や育ちについて、さらなる研究データが必須であることはいうまでもない。

Ⅲ-2. 調査記録 一年中児一

[表3]

①第2回目 年中児3クラス(88名)、担任保育者3名と補助保育者3名
<p>Dクラス</p> <p>〈子どもたちの動きについて〉—担任保育者と調査人の観察結果—</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おおまかではあるがに、子どもたちの中でテーマとする動きがあった。子供同士動きを見合う中でテーマを共有しているようにも感じられた。 （1曲目…スキップ、2曲目…走る、3曲目…回る、4曲目…みんなで中央に集まっていく、5曲目…うづくまる） ・ファシリテーターには、ほとんど関心を示さない。 ・担任保育者は、途中で姿を消している。 ・何かの世界に入っており、ストーリーを演じているような子がいた。 ・表現を考えようとする子どもの様子が多くみられた。 ・考えていくうちに自分の対象となるものを見つけて真似るといふ子どもが多くいた。 <p>〈子どもたちの事後の感想〉—調査の言葉通りの記載—</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつもと違う音楽が楽しかった。 ・走るのが回っているようで楽しかった。 ・ドキドキした、はじめてやることだから、でも楽しかった。 ・スキップがウキウキした。

14) 小島律子著「音楽学習における身体活動の展開」『大阪教育大学紀要 第32巻 第一号』1983年 p.91

- ・ むずかしかった⇒どうしたら「そうだね」っていってもらえるかわからないから
 - ・ 太鼓の音が大きくなったり膨らんだり小さくなったりして楽しかった。
- 〈担任の感想〉
- ・ 集団行動では配慮の必要がある子どもが2～3名いるが、この活動中は落ち着いていた。集団の中にも怖がらず、自分の動きをしていた。
 - ・ ★日頃の保育中には、「音」を恐がる子どもがいる。ストーリーをイメージすると、言葉から想像するものに恐怖心を持つことがあるため、耳を塞いでしまう。しかしこの活動は落ち着いており、活動中に「怖いか」と質問したが、「怖くない」と答えた。その後自ら身体を動かし集団のなかに入っていく。リトミック活動中は、与えられるテーマ（言葉）への先入観から音が怖くて動けないため、この反応に驚いた。
 - ・ 日頃の保育で特に前向きな子ども3名が、音に対して創造力を働かせ、表現に夢中になっている様子がとてもよく分かる。
 - ・ 自分の真似をさせていいものかと思い、途中から抜けた。
 - ・ 正解はないのか、途中不安になったが、ビデオを見てみると、思ったより多くの子どもが音楽の雰囲気をつかんで表現していることが分かる。
 - ・ 子どもたちが表現を考えようとしていることが感じられる。そして瞬時には如何に動いてよいか分からない子どもは、共感できる子どもの動きを真似ている姿も発見できた。

Eクラス（Dクラスと同様の動向については表記を省略）

〈子どもたちの動きについて〉－担任保育者と調査人の観察結果－

- ・ それぞれに動きを表現しようとしている。
- ・ 自分の世界を考えて動こうとしている。
- ・ 一曲ごとに曲のイメージを掴もうと好奇心があるように見える。
- ・ 友達の動きを見つけようとする子どもの数が少ない。

〈子どもたちの事後の感想〉－調査の言葉通りの記載－

- ・ 楽しかった。
- ・ 夢の中にいるみたい。
- ・ 太鼓の音がかっこよかった、恐竜マンモスが歩いているみたい。
- ・ 鳥みたいになって飛んだ。
- ・ スケートでぐるぐる回りたくなった。
- ・ 歌は歌ってないのに、歌が聴こえたように感じた。
- ・ すがすがしくピカピカしていて、眩しい音が聴こえてきた。

〈担任の感想〉

- ・ 曲ごとの感想を担当と子どもたち全員で話し合い、活動のまとめを行った。

（※調査側から指示はしていない）

1 曲目 ピアノの曲で広がったようだった。

2 曲目 どこかから歌が聴こえてきた。

3曲目 雨の音がした。

4曲目 雷が鳴ったから鬼になって走り回った。

5曲目 逃げる事ができた、安心した。

- ・「音楽を聴いて」という活動だったので、動けないのではと不安だった。担任のそばから離れないのではないかと思ったが、全く違った。
- ・全員が同じ動きをするのではないかと心配したが、それも違った。

⇒担任は、「自分の思う通りに動いていいよ」と、前日に声掛けをしている。

- ・普段言葉が遅れ気味の子の方が、より表現が豊かな結果になっている。
- ・はしゃいでいるように見えたが、その子たちなりの動きの違いを見つけた。
- ・集中力が思ったより続いた。
- ・普段にない活動に興奮しているように感じた。
- ・表現するという事は、少し恥ずかしいところもあるが、子どもの頃に素直に自分を表現できる環境や体験が大事なのかなと、改めて実感できた。（原文のまま）

Fクラス（D.Eクラスと同様の動向については表記を省略）

〈子どもたちの動きについて〉－担任保育者と調査人の観察結果－

- ・誰かの動きにつられて、同じ動きになるが、そこから個々の表現が見られる。
- ・真似るための戸惑いなどがなく、のびのびと真似しているように見える。
- ・途中から、担任保育者は活動から抜けている。

〈子どもたちの事後の感想〉－調査の言葉通りの記載－

- ・楽しかった。
- ・雷の音がして、本当に落ちたみたいだった。
- ・トライアングルの音で走るのは楽しかった。
- ・5つ目のピアノの音がかわいかった。
- ・フワフワと小鳥みたいに雲の上にいるみたい。
- ・グルグルで、アリスのティーカップみたい。
- ・最後の曲に、ウインドチャイムやピアノきれいだった。
- ・太鼓の音のドンドンで、頭を守るのが楽しかった。
- ・楽器の音がたくさんあって、ピアノやウインドチャイム、トライアングルがきれいだった。

〈担任の感想〉

- ・言葉の発達が遅い子どもが数名おり、日ごろの保育では言葉で伝わらないため絵を描くなどして説明することが多いが、この活動では音楽を自分で感じ取っているようで、自分で動いて自分を表現している。会話をする時よりも、澁瀬としており表現しようという意欲が見られる。
- ・制作などはとても手がかかり、落ち着きのない子どもが、この活動の中では音楽の中で他の子どもと同じように活動している。

- ・情緒不安定なクラスと感じているが、この活動では感情表現が豊かになり、落ち着いてそれぞれがのびのびと動いているように感じる。
- ・担任の動きは、子どもを邪魔してしまいそうに思ったので、活動から抜けてみたが、何の支障もなかった。
- ・活動中の動きに対しては、適当に動いているのでは、と感じることもあったが、ビデオを観て、音楽を感じて自発的に動いている活動であることを確認した。

〈年中児の分析・考察〉

年長児と比べて、子どもたちの動きについては、個々の動きの特徴が比較的是っきりとしていた。同様の動きをしていても、戸惑ったり考えたりというよりは、自分の思うような動きを展開できているように見て取れた。また、ファシリテーターの影響もほとんど見られず、活動中担任は自ら活動の場を離れている。

〔表4〕はⅢ-2の調査記録を基に、年中児の動き方の特徴を分類し集計したものである。a～eの項目についての分類は、調査人と打楽器演奏熟練者の協議によって行い、それぞれの項目に該当する子どもの分類については、担任保育者、調査人、打楽器演奏熟練者の協議によって決定した。

〔表4〕

動き方の特徴	90人中(3クラス) 2人欠席		年長児
	年中児		
a. 個々に音楽を聴き入り、動きに集中している	34人	39%	8%
b. 自分で動きながらも、担任(又はファシリテーター)の動きを取り入れようとしている。	4人	5%	11%
c. 友達同士で関わって動いている(個々のグループ)友達の動きから自分の動きを考えようとしている	36人	40%	53%
d. 不明(予想できない)な動きをしている(走り回るのみ等)	10人	11%	19%
e. 無関心のように見える(事後の感想などからは無関心とはいえない)	4人	5%	9%

これらの数字を比較してみると、年中児は年長児に比べると、自由な表現を他者に求めず、自己の表現で行っている数が多いことがいえる。また、他者から動きを真似ていても、周りの視線や状態を気にしている様子があまり感じられない。この点に関しては、年齢的なものであるのか、クラスの雰囲気の影響しているのか、担任保育者の各々の事前の説明の違いなのか定かではない。このことは、調査の前後のクラスの状態や、保育者のそれぞれの子ども

への関わり方にも関係性があるため、明確な要因をここで挙げることはできない。しかし、動きだけを見てみると、明らかに年中児は音楽に傾聴し自由な動きを自分で楽しんでおり、周りの視線を気にせず、自分の動きを創りだしていく行動に不安が感じられないのである。

調査後の担任保育者の感想部分に着目していくと、年長児全てのクラスの担任は、表現（動き）の正解がないことへの不安を訴えている。また、他のクラスのことを気にしており、出来栄えに対する評価が気になっている点については、就学前の年長児を担当するという使命感や重圧によるものが大きいのもかもしれない。

それに対して年中児の担任保育者は、子どもたち各々の日頃の様子と今回の活動の違いや、担任と子どもの活動の距離感、曲毎の表現のしやすさなどについて考える動向が保育者3人にみられた（インタビューより）。また調査後の子どもたちへのインタビューでは、担任からの一方的なインタビューではなく、保育者と子どもたちが共に活動を振り返り、話し合ったという記録があり、音楽を子どもと一緒に感じようとした担任たちの調査への興味と理解があったことが推測できる。また、保育者から子どもたちへのインタビュー調査時の「自分なりに動くことができましたか」という質問には、全体で79名（約90%）が「できたと思う」と回答している。

一方、他者への関心については、年中児よりも年長児の方が、明らかに周りの動きや様子についての興味があり、曲に適した表現、自分が求める動きを周りから得ようとする動きがあったことは調査時にも見受けられた。しかしそれは、全く同じ動きを真似ようとするわけではなく、自分の動きをそこから模索しようとする様子であることは先にも述べた通りである。

小島は、動きのパターンについて、大きく分けると「自由」と「形」の二つ形式に分けている¹⁵⁾。全く自由に動くことと、合図的なものや模倣的動作が決められている動きをすることである。

ここでの2回の調査結果を、この二つの形式に分けるとするならば、年長児は自発的ではあるが「何かの形」を求めて活動していたと推察され、どちらかといえば「形」を重んじていたと解釈できよう。例えば、年長児Cクラス調査時では、曲が変わる際、子どもたちの関心を曲の変化に集中させようとして発した「次の曲を聴いて!!」というファシリテーターからの呼びかけに、静止しているファシリテーターの形を忠実に真似ようとしたり、曲が流れている時よりも身体の静止に全力で自分を表現しようしたりとする動作が確認できている。そこには「静止」というスタイルの素材が明確に存在していたため、子どもが自分を表現できると理解したため起こったものであろう。

これに対して、年中児は「自由」の形式に当てはめられ、それぞれの楽曲に傾聴してそれに自ら関わり、子どもたちが自分の感じる表現活動を試みていたといえる。周りは気にならず自分の納得する動きを続ける子ども、友達を真似て自分なりに表現するが、周りとは違う動きに動揺しない子ども、自他共に表現を認める行為には焦りが感じられず、見られていることにも違和感を示す様子が殆どみられなかった。

15) 小島律子著「音楽学習における身体活動の展開」『大阪教育大学紀要 第32巻 第一号』1983年 p.92

このことを先に挙げた、小島のいう「同化」つまり対象になじむという観点から考えるとすると、調査2回目の年中児には、その同化がより多く確認出来たといえる。

これら1回目と2回目の調査の違いを有効的に考えていくなれば、子どもの音楽活動が規制的傾向にある演奏の形を経験する前に、感じ方の自由を認めることのできる音楽的表現活動を体験することは、意義のあることと考えることができる。

Ⅲ-3. 年長児・年中児の音（音楽）の感想について

子どもの感想については、クラス毎で、「今日の活動はどうでしたか。どんなことでも感じたことを話してみよう。」という担任からのインタビューで行われた。ここで、年長児・年中児共通した回答の特徴が表われている。それは子どもたちが自分の身体の動かし方やポーズなどについて述べるのではなく、音楽を聴いて何を感じたかについての感想を述べている点である。特に年中児は、楽器の音に対して具体的な感想を述べ、曲のイメージについて比喩的な例えをするなど実際の動きに結びつくような表現も多々あった。さらに曲の題名は告知していないにも関わらず、彼らの言葉からは曲名に匹敵する表現があり、子どもたちが考えた動きが、感想の言葉と一致する箇所がビデオ視聴にても確認できている。

このことは、音楽の中にある対象を把握し、自分の感じたままを自分の方法で身体表現し直した、という解釈に当たるものである。小島は、身体活動の分類枠組みについての一つに、音楽学習における動きの機能を挙げており、そこには「同化、分析、表現（解釈）」¹⁶⁾が含まれると述べている。今回の子どもたちの表現活動には、この中の「表現（解釈）」に当てはまるものがいくつかあったとみられる。

さらに、年中児についていうならば、感想時の子どもの表現からもわかるように、子ども同士、また保育者と子どもが話し合いながら振り返るという対話的な学びを行っている。無藤は、「幼児教育における重要な学習としての遊びは、環境の中で様々な形態により行われており、以下のアクティブ・ラーニングの視点から、絶えず指導の改善を図っていく必要がある。その際、発達の過程により幼児の実態は大きく異なることから、柔軟に対応していくことが必要である。」¹⁷⁾としているように、今回の活動に対し、保育者が「主体的学び」「対話的な学び」「深い学び」のそれぞれの視点を意識し、アクティブ・ラーニングを実施していたことにより、子どもたちの表現がより明確化されたと分析することもできる。今回の調査では、振り返りの内容を比較してみると、特に年中児についてこの取り組みに意欲的であったといえる。またその振り返りからは、子どもたちが主体的に動くため、自ら「音に傾聴する」ということに気付き、音のイメージから様々な情報を結び付け、自分を試しながら、周りを感じながらそれぞれが表現に挑んでいたことを、保育者が確認することができている。そして、このことを後の保育に生かしていけることはいうまでもない。これらの過程を幼稚園教育要領に視点を置いて見ていくと、今回の活動は「音」「音楽」を感じ自分なりに表現するという主体的活動が実施されていたといえる。

16) 小島律子著「音楽学習における身体活動の展開」『大阪教育大学紀要 第32巻 第一号』1983年 p.92

17) 無藤 隆著『3法令改訂（定）の要点とこれからの保育』チャイルド本社 2017年 p.68

Ⅲ-4. 集団行動を苦手とする子どもの動向について

本調査の重要な記録の一つに、年中児、年長児両者にみられた「集団行動に配慮が必要な子どもたちについて」がある。[表1]と[表3]の中に網掛け（）してある部分は、日頃配慮が必要な子どもたちの前向きな行動を読み取ることができる。他の集団活動では見られなかった自ら友達に関わっていく姿、何かを前向きに表現しようとする姿、興味のある友達の手を自ら取って関わる姿、また、言葉の数が少ない又は心配な子どもたちが表現した自発的な身体表現など、日頃の保育室ではみられない彼らの姿を、6人全員の担任保育者たちが確認している。西は、舞踊教育の課題として以下を挙げている。「身体表現活動の自由度を活用し、障害の有無に関わらず、より多くの人々からだや動きによる創造と表現の機会を提供することや、直接的なコミュニケーションを通して他者の個性に触れ、それを相互に認め合う機会を提供することは、“共に生きる”ことが社会的テーマとされる時代性を背景に、学校教育や社会の中で、今後より積極的に取り組むべき課題とされている。」¹⁸⁾ 今回の調査では、配慮が必要な子どもについての具体的な障害の有無は全く触れていないため、障害についての見解は値しない。しかし、その有無に関わらず、自分の内と自分の外にコミュニケーションを作り出すということが身体を動かすことによって実現する可能性があることが、今回の調査からも検証できたといえよう。また、音を素材としていることから、さらにその表現のイメージや具体化を助長し、その音の持つリズムやメロディー、音色から他者との共有についても交わりを感じるきっかけがあったのではないかと考える。

事例としては、年中児Dクラスの音を恐がる子ども（[表3]★）は、本調査が言葉やストーリー性のある音（音楽）を用いたことや、事前に情報のない音楽に対して、自身の感じ方ができたことから、音楽の持つイメージを自分なりに解釈することができ、この活動に自分なりに参加することができている。この園児にとって、音への印象が一瞬ではあろうとも変化したことは期待でき、今後の音環境への改善や工夫によって、音楽への向き合い方も広がりを見せることができるかもしれない。その意味からも、このような活動を行ってみることは、配慮が必要な子どもと必要としない子どものコミュニケーションの向上、自他共に認め合うことへのきっかけとなるはずであるといっても過言ではない。

IV. まとめと今後の課題

今回の調査は、筆者がこれまで行ってきた調査と違い、演奏が生演奏であったこと、また特に子どもたちに馴染みやすい打楽器を使用したことから、子どもたちが「音」を意識的に又は無意識に注意深く聴こうとしていたことが、これまでの筆者の調査（ピアノ演奏のみのCD使用調査）より明確に採取できたことが特徴といえる。そしてそれは、身体表現をするという最終目的があったからこそ発見することのできた表現のプロセスといえよう。子どもの音楽教育を演奏という形式に特化することなく、「音を聴き、感じたものを大切にする」というプロセスに注意を払い重きを置くことは、演奏（歌唱・楽器演奏）という枠に捕らわ

18) 西 洋子著「障害のある人々を対象とする身体表現活動の指導の現状と課題」『舞踊学1999巻(1999)22号』舞踊学会
1999年 p.57

れることなく子どもたちの表現力を養い、今後の社会生活に柔軟に対応できる表現力の育成の基礎になるものとする。吉永は、「さまざまな音や、複雑な響きを経験しながら、子どもは音のインプットをふやしていく。インプットが増えるにつれて連想の枝葉も増えていき、その増大を受けて想像の世界は豊かになる。だがしかし「音」は、音楽にかかわる活動をしているときにだけ存在するものでもない。」¹⁹⁾と述べている。今回の調査結果から、保育における音楽や身体表現活動は、教科の学修を目指すことだけではなく、子どもと音楽との関りが子どもの成長過程を促す活動となるものであり、またそのプログラムの実現につながるものと実感できた。そのためには、表現領域の各分野の融合を具体的に示し、分かりやすく保育現場に伝えられるような表現活動研究が必要であることが、課題として明確にされたと考える。

さらに本調査の問題点は、同じ方法と説明で開始した2つの調査であったが、調査に対する保育者の認識の違いが大きく表われていたことである。

このことは、「小1プロブレム」と幼少接続における連携協力を求められる中、文部科学省は、「小1プロブレム」の発生理由をいくつか挙げているが、その中には、「幼稚園・保育所が幼児を自由にさせすぎる」がある²⁰⁾。この点を負の要素として捉え、何らかの改善を図ろうとすることに視点を置くならば、年長保育者が今回の調査に対して違和感を覚えたとしても納得のいくところである。また、幼児教育の領域「表現」にある「感じたこと考えたことを自分なりに表現しようとする」に対する表現活動の扱われ方や位置づけは、各々に任されており、具体的な方法論も挙げにくいことなどの要因もあり、今回のような活動に対する保育者の理解が得られていないことも浮き彫りとなった。

本調査からは、自発的活動であるからこそ保育者の理解が必要である、ということも結果に表れており、保育者養成についても自発的表現活動実践の充実と教育内容の具体化に努めていかなければならない。今後引き続きこれらの調査を実施し、十分なデータの収集に努め、子どもの表現教育の育成に繋げていきたい。

〈謝辞〉 ご協力いただいた静岡県A幼稚園の職員の方々と園児の皆様に深く感謝いたします。

*参考文献

- Claire Paolacci 著 *DANSE et MUSIQUE* Librairie Arthème Fayard 2017
小松正史 著 『サウンドスケープのトビラ』 昭和堂 2013年
山田陽一 著 『響きあう身体』 春秋社 2017年
山田陽一 著 『音楽する身体』 昭和堂 2008年

19) 吉永早苗著 無藤 隆監修 『子どもの音感受の世界』 萌文書林 2016年 p.19

20) 文部科学省 資料3 「幼児期の教育と小学校教育の接続について」 p.21

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/070/gijigaiyou/icsFiles/afieldfile/2010/06/11/1293215_3.pdf